
メイド☆in My Home !

S・T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイド☆in My Home!

【Nコード】

N6406F

【作者名】

S・T

【あらすじ】

我が家に送られてきた一台のロボット。それは俺の父が造り上げた人間と機械の最高傑作「Type-AX1736《アリス》」と呼ばれた人造人間。普通の家事とかお手伝いさんくらいなら全然いいんだけど……「和也さん、和也さん。ワタシ、あの窓が少し気に入らないので破壊してきます」「え、アリスさん？ ちよつと……駄目えええええッ!？」好戦的で、何をするにも抜けているところが玉にキズ。加えて銃刀法違反で捕まるような武器を常に持ち歩いている（内臓している）最強のメイドさん。軍隊でも……この人には

勝てそうにありません……。俺、佐伯和也（自称、永遠の高校生）の住む家に、今日もロボメイドの大波乱が巻き起こる……。

プロローグ

ここはどこかの研究所。そして、研究所の地下施設。

密閉された地下という空間の中、最奥の研究室から不審な声が聞こえてくる。

中を覗けば、そこには大きな棺程度のダンボール箱に、白衣を着た男女が二名、腰を屈めてその中身を確認していた。

「ふふふふ……」

白衣を着た40代半ばの中年男性は、その脂ぎった顔で箱の中を見つめ、いやらしい笑いを漏らしていた。

それを見て、同じように白衣を着た女性が、ゲテモノを見るような顔つきで口を挟む。

「博士。脂ぎった顔で笑わないでください。純粹に気持ち悪いです」
激しく同意です。

「おお、霧絵くん。その一言で私は純粹に傷ついたぞ！？」 ちょ
っとだけ心に傷が入ったよ！」

その箱に入っているものから目を離し、博士は横に立っている女性に向けて言った。

「あら、博士に純粹さなんてありました？ それは以外です。私には、肥えた豚が欲情した時の顔にしか見えなかったのだ」

白衣を着た女性――霧絵は、そう言いながら博士に向けて微笑んだ。

微笑みの下に隠された哀れみたっぷりの蔑みは、もはや言うまでも無い。

「私は豚ではないぞ！ 確かにここ最近では体脂肪が増えているが…：それでも私は豚のように醜くない！」

「いえ、豚のように醜いのでは無くて、博士自身が豚以上に醜いんです。改めて実感しました。気持ち悪いですね…：あ、いえ訂正します。改めて実感しました。キモいですね」

「それは訂正に入っているのだろうか…：？」

博士は悩み顔で腕を組み、首をかしげる。改めてキモいですね。

「と、とにかくだ！ この《Type-A X1736》は和也にとって絶対に必要になる！ 私が保証する！」

握り拳でその箱に包装されたものを見つめながら力説する。

博士のその脂ぎった顔から脂ぎった汗が滴り落ちて、霧絵はグロテスクなものを見つめるかのような顔つきになる。

「…：ところで、何故この女性ロボットは裸なんですか？ 無駄に巨乳なんですか？ …：ああ、成る程。博士の趣味ですか。だからさっき笑ってたんですか。本当に腐った豚ですね。あなたが人間だということに驚きを隠せません」

霧絵は、博士こと腐った豚に尋ねた。

腐った豚は、眉間にしわをよせて喘ぐように言う。

「私は腐った豚じゃないぞ！ それに、巨乳は私の趣味などではな

い……男の「ロマン」だからだ！」

「そうですか。では博士。私の半径3 m以内に近づかないでください。近づいたらその男のロマンと共に博士の眉間に発砲します」

「え、それ酷くね？」

引きつった笑顔を見せ、霧絵から数歩後ずさる博士。

腐った豚でも発砲は怖いらしい。命まで取られるとは本人も思っていないかったのか、ダンボールと霧絵から離れ、研究室の外の扉から中の様子を伺う。

「……後はそれを和也の所まで輸送するだけか。よし、霧絵くん。ちょっと宅急便を手配してくれ」

「分かりました。シロネコヤマトの宅急便ですね」

霧絵は腐った豚の指示通り、ポケットから携帯を片手に取り出すと、手馴れた手つきでボタンを押す。

コールがかかり、電話にでる霧絵。それに対し半径3 mを越えないように、こっそりと研究室内に入ってくる腐った豚。

その時だ。

「なあ、霧絵くん……せめて半径3 mじゃなくて2 mにしてくれないかウイイイイ！？」

「どうしました博士。ついに豚として覚醒しましたか？ それはいいけません。今すぐ楽にして差し上げますね……って、これは……」

霧絵は一旦電話から耳を離し、腰に携帯してあったリボルバーに弾を装填しつつ、博士の眉間に向けて発砲しようと焦点を定めた。だが、その焦点を定めた博士の後ろにいる人物に、霧絵は驚きを隠せなかった。

そう、そこには……

「ちょ、霧絵くん！ 私マジで感じてるよ！ ナイスバディの夢心地にトリップしているよ！」

金髪碧眼の、髪の長い女性がそこにいた。

そいつは……まちがいない。先ほど宅急便で送り届けようと思っていたロボットだった。

先ほどまで包装されていたロボットが、いつの間にか起動し、博士を襲っていた。

それはもちろん性的な意味ではなくて、危険な意味で。

ロボットは博士の首筋に手を回し、羽交い絞めの状態に持ち込んでいる。

博士自身は、その押し付けられたロボットのナイスバディを、にやけ顔で堪能していた。

本当に死ねばいいのに。

霧絵は、博士に向けて聞こえるようにつぶやいた。

その言葉に対応するかのように、博士を羽交い絞めをしているロボットから、機械的な声が漏れてくる。

「キケン……感知……ジョウホウ……削除……博士……マッサツ……」

「え、今なんか抹殺とか聞こえなかった？ 博士の後に抹殺とか聞こえなかった？」

「大丈夫です博士。私には摩擦としか聞こえなかったの」

「そうか……この体制で摩擦か……それは男としてイヤツフウウウウツ！！！」

鼻息を荒げてガッツポーズをする博士。

首へし折られて死ねばいいのに。

霧絵は、博士に向けて叫ぶようにつぶやいた。

助ける余地も無し、か。

宅急便の手配が完了すると、霧絵は手に持ったリボルバーを腰に戻し、くると後ろを振り向いて研究室を後にする。

もちろん、彼女にとって博士はどうでもよい空気のような存在なので、助ける気などさらさらしない。

まして、博士こと人類と呼べぬ豚の虐殺シーンを見ているほど霧絵は暇ではない。

「博士。後でちゃんとそのロボットを和也さんのところまで届けてくださいね。私は帰って寝ますので」

「分かったぞ霧絵くん！ この子は私が責任を持って和也のところに送り届けるぞよおおおお！！！」

「博士……抹殺……」

「そうだロボットくん!! ははは早く私に摩擦うおおお!!?」

豚の発情に付き合いきれません。

その一言を胸に、霧絵は研究室の扉を閉める。

それと同時に聞こえる、豚のつんざくような悲鳴。

「いい気味です。しばらくロボットにターミネートされてなさい」

博士に聞こえるはずもなく、一人つぶやく。

含み笑いを浮かべている様子も、彼女のドSっぷりがよく分かる瞬間でもあった。

「……はあ」

ふと足を止め、深いため息をつき、彼女はポケットから一枚の写真を取り出す。

それは昔から保持していた物なのか、今ではずいぶんと色あせて、古くなっている。

今でも肌身離さずに持っている、一枚の写真。

それは霧絵にとって、何よりも大事な物であり、何よりも大切な「宝物」であった。

「和也さん……」

笑顔で並んでいる霧絵と和也の写真を見て、彼女は想い人の名をつぶやき、その場で再び深いため息をついた。

第一章一始まりはいつも血の雨―＜其の一＞

冬。

暖かな日光が、部屋の窓から輝くように差し込んでいる。というより、それは暑いくらいの日光だった。

だからと言って、外に出ても少しは暖かいんじゃないのかと意気揚々に玄関を開けたのは間違いだった。

途端に我が家に入り込んでくる冷たい冬風。冷風が顔を、身体を瞬く間に冷やしていく。

馬鹿なことだと分かっていた。

温暖化が進んでいるとはいえ、12月が暖かいわけじゃないじゃん。

「……さむっ」

一言呟いて、俺こと佐伯和也は全快にした扉を閉めた。

うわ言のように寒い寒いと呟いて、リビングにあるストーブまで駆け寄る。

隣には、台所で包丁を持ち、トントンと軽快なリズムで野菜を切る母親の姿が見える。

……ん？

「母さん。そろそろストーブの石油が無くなるよ。給油したほうがいいんじゃないか？」

「あら、そう？ それじゃ和也。玄関にある給油ポンプから石油を入れてきてくれない？ 母さん、今は手が離せないから」

「ああ、分かった。玄関だな。入れてくるよ」

エプロン姿で料理をする母を尻目に、玄関まで小走りで走る。

片手には、石油を入れるための容器。

名前は忘れた。まあ、覚えなくても必要ないだろう。

玄関の靴箱の横から、買い置きしていた給油ポンプを取り出し、容器の蓋を外して石油を入れていく。

手慣れた作業でそれを満タンまでいれ、ほどよい重さになったところで蓋を閉める。

よっこらせつ、と声に出しながら、石油が入った容器を持ち上げる。その時、ピンポンという、ごく普通の家庭にありきたりな呼び鈴が鳴った。

「あ、はい。どちら様ですかー？」

石油の容器をその場に下ろし、玄関越しに尋ねる。

すると、外から若い青年の声が元氣よく聞こえてきた。

「こんにちはー！ シロネコヤマトの宅急便でーす！ お荷物をお届けに参りましたー！」

「あ、それはご苦労さまです。今あけますねー！」

応じるように俺は玄関の鍵を開けて、ドアを開けた。

だけど、そこで待っていたものは、もはや宅急便とは呼べない代物だった。

「……でかッ!？」

俺の家に届いた宅急便。

その全長は、おそらく俺の20cmは越すであろう大きなダンボール。

「シロネコ便」と周りに貼られてあるシールは大きさ故に何重も使われているのか、トレードマークである猫の絵が「無駄遣いニヤ：」と言わんばかりに、もの悲しげな表情に変わっているように見えた。

縦に入れても横に入れても、絶対に玄関で詰まるよね、これ。

「そ、それじゃあ判子をもってきますね」

巨大な宅急便に少しだけ驚きを隠せないまま、俺はリビングまで向かうとする。

「あ、判子は結構ですよ。ご本人様の名義と肉印をして頂ければ」

だが、そんな俺に笑顔が眩しい宅急便の兄さんが優しく言う。

「え、ご本人って……俺ですか？」

「はい、佐伯和也様宛にお荷物が届いております。是非ご確認をお願いいたします」

「俺宛に……？」

住所や郵便番号、電話番号などが記載されたところを確認する。

そこには、確かに俺の名前が書かれてあった。

そして、その送り主が……

「佐伯達也……って、これ父さんの名前じゃん」

俺の父親の名前が、流暢な文字で記されてあった。

珍しい。研究所に竊って、そこいらのニートと同じような生活に陥っている父から届け物とは。

昔っから怪しげな研究をして、そのまま家に帰らなくなってから5年は経ったが……まさか生きているとは思わなかった。

まあ、携帯に何通かメールや電話が入っていたりするのだが……全部ウザくて無視してたし。着信&受信拒否は当たり前だったし。

自分の名前を確認すると、俺は肉印を押して領収書を受け取り、荷物を受け取った。

宅配お兄さんは「またどうぞー!」と一言言って、駆け足でその場を離れていった。

それにしても……この宅配物、重い。まるで、人間を担いでいるような重量感がある。

「一体、父さんは何を送りつけてきたんだろ……ったく」

悪態をつきながら、よろよろとした足取りで玄関に入る。

そのまま荷物を落とさないように細心の注意を払いながら、階段を上って2階の自室へと運んだ。

「よいしょ、っと」

ベッドの上に宅配物をぼふっと乗せ、その横に座る。

改めてじっくり見れば、本当に大きなものだ。

「……っていうかコレ、本当は人間でも入ってんじゃないの？」

まじまじと箱を見つめ、苦笑する。

アホか。普通に考えて、人間なんて入ってるわけないだろ。

もし入ってたりしたら、父さんを警察に連れていくって。うん、絶対。

法廷で「悪気はなかったんです。つい魔が差しました！」って言わせてやるよ。

ま、そんなどうでもいいことを考えても埒があかないので、大きな段ボール箱をベッドに寝かせる。

そしてカッターナイフを机の引き出しから取り出し、器用に封を開けていく。

何だろなくという好奇心もあってか、ちょっと乱雑に封を開けてしまふ俺は大雑把なのかな。

よし、中の物のご対面♪ っとちよつとだけワクワクしながら、最後のダンボールの封を開けた。

………。

………。

………。

………うん。

あの……これは、何？

少しばかり、考える時間をください。

目の前のダンボールに入っている摩訶不思議アドベンチャー的なものの存在を認識するまで、時間をください。

よし、頭の中で整理ができました。説明します。

簡潔に説明すれば、箱に入っているものはただの宅配物ではありませんでした。

それと同時に、自分の父親に激しい憎悪が湧き上がってきました。ええ、信じていたのに裏切られた気分です。

あ、元々信じているつもりありませんが。

とにかく、父親には明日辺り警察に行ってもらいます。そして俺の手で顔面にパイをぶつける予定です。

もちろんジョークとかではなくて、17年間育てて頂いて誠にありがとう。でもアンタには12年しか育ててもらってないよね、という感謝の意を込めて。

さて……長々と話しましたが、その中にあったものを発表します。

簡単に言います。

フリフリのメイドです。

その一言に尽きます。

父親……あ、いえ訂正します。ファツキンファーザーは金髪のメイドさんを送り届けやがったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6406f/>

メイド☆in My Home !

2010年10月9日04時06分発行